

---

# 美麗戦隊ティンカーV (ファイヴ)

晶輪寺零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美麗戦隊ティンカーV ファイヴ

### 【Nコード】

N4764H

### 【作者名】

晶輪寺零

### 【あらすじ】

神愛美 生徒会長、人呼んで”学園の女神様”。荒井勇氣  
周囲は”弓道部の女傑”と彼女を呼ぶ。天野翔子 自称”新体操部の白き天使”。海原水魚 ”水泳部の人魚姫”と呼ばれるボーイッシュな少女。花園妖子 ”園芸部の妖精”の異名を持つ不思議な女の子。彼女たち五人こそ、美麗戦隊ティンカーV！凶悪帝国デスハードの野望を打ち砕くべく、今日も五人の少女たちは戦う！デスハードの大幹部、ムチムチプリンセスの高笑いがこだまし、何やかや、訳の分からん大混戦の幕は切って落とされたのであった。

## 愛と正義の美麗戦隊！ 【1】

「キヤー——！」

辺り一面に響き渡る、絹を切り裂くような、女性の悲鳴。

「な、何、あんた達」

異様な一団に取り囲まれた女性は怯えて目を白黒させていた。

それも致し方ないであろう、自分を取り囲んでいるのは、奇妙な仮面に黒装束、髑髏のレリーフを施した大きなバツクルのベルト、手に蛮刀だか手斧だかを携えて、口々にイー、イー、と奇声を発する、徹底的に奇天烈な一団なのだから。正直、笑いを堪えていると言つのも本音だが、正常な感覚の人間ならば怯えるのも当然と言つものである。

“な、何、こいつら。アブナ過ぎ——”

訳が判らなかつた。

如何に最近治安が悪化し、日常的に異常犯罪が多発している御時世とは言え、世界に名だたる法治国家ニッポンにおいてこのような事態が勃発しようとは、健全な毎日を慎ましく送っている普通の一般市民ならば夢にも思つまい。否、世界中のどこの国でも、こんな珍妙な連中に白昼堂々往来のど真ん中で取り囲まれるなどと言つ異常な事態に遭遇するなどは想像も及ぶまい。奇想天外の四文字を絵に描いたような、これでもかとはかりに非常識な珍無類の軍団だつた。

その時である。

「チューチュー——」

不自然に上ずつた、異常な叫びとともに、奇怪な一団の中にあつて取り分け異常な、最早人間とは思えぬ存在が姿を現した。

“何、何よ、コイツ——”

それはまさしく人間ではなかつた。

どう見てもかぶりものとしか思えない蛸のような顔に、肩一面にその八本の足と思しき長いものがぶら下っている。しかも、下半身には黒くてふさふさの大きく長い尻尾が生えており、何故か白いラインが入っている。両手にはゴム手長のような厚手の手袋、足には分厚いごわごわのブーツ。しかも、全体の肌触りが樹脂が何かのようにチープな造型感を漂わせ、動く度に体の特定の部分に皺が寄るのである。

人間ではなかった。

もし人間ならば、こんな恥かしい扮装のまま街中をうろつく事など出来る筈は無いではないか。人間を捨てた何者かであった。

「貴様、藤枝恵理子だな――」

「は、はい――」

女――藤枝恵理子は消え入りそうな声で答えた。

「藤枝教授の一人娘、藤枝恵理子に間違いは無いのだな？」

「はい」

出来るだけ逆らわないようにしよう。その時、恵理子はそう思った。相手の目的が何なのか良く判らないが、一刻も早くこの場から立ち去り、後は忘れてしまいたかった。これ以上こんな連中に関りたくはない。早く済ませてこの場から離れたかった。

しかし、相手の答えは無情であった。

「それでは一緒に来てもらうぞ、チューチュー！」

「ええー?!」

冗談ではない。こんな常軌を逸した連中と連れ立って街中を歩き回るなど、死んでもゴメンだった。今でさえ知り合いに、それ所か誰か他の人に見られてはしまいかと気が気ではないのに、これ以上彼等と付き合うなど、出来る相談ではない。しかし助けを求めようにも、幸か不幸か、不思議と周りには人の姿が無かった。余りに異様なこの一団に恐れをなし、近寄って来ないのかも知れなかった。しかし、それは彼等の周到な作戦によって妨害されていたのである。

恵理子は知らなかったが、用意のいい事に連中はメンバーの一人を

路上に立たせ、

「すいません、今、撮影中なモンで、ちょっと遠慮してただけませんか？本当にご迷惑かけて申し訳ありません、この通り、ご協力お願いします」

等と通行人に頭を下げさせていたのである。

恐るべき作戦であつた。

「それでは、ご同行願おうか、藤枝恵理子嬢、チューチュー」

「いやー！」

恵理子は叫び声を上げた。

その時である。

「お待ちなさい！」

凜と心地好く通る、女性の声が辺りに響き渡つた。

「誰だ？」

「一体どこだ？」

黒装束の一団が、戸惑つて周囲を見回した。

「どこだ、どこだ——」

「どこだ」

「あそこだ！」

泡を食つたようにわざとらしくそこから中を捜す黒装束にあつて、一人が高々と大仰に指差した先には。

通りの脇に有る、給水タンクの上に立つ、五人の人影。

ここにこうして御あつらえ向きの舞台が存在するのは、決して偶然ではない。撮影だと説明するにはそれらしいロケーションが良いと言つのでわざわざ選んだ場所なのである。

五人は顔をバイザー状のゴーグルで隠し、それぞれ色違いの鮮やかな衣装を身に付けて腰に手を当て立っていた。どうも女性、それも若い娘らしい。

## 愛と正義の美麗戦隊！ 【2】

「愛と正義の命ずるままに——」  
赤い衣装の娘が言った。

「この世の悪と、渡り合う——」  
黒い娘が後を引き受けた。

「天の裁きは我等が下す——」  
白い衣装の少女。

「大海原に、命の息吹き——」  
青装束の娘が続く口上を述べた。

「花と咲かせて、乙女の願い——」  
最後に桃色の少女が締め括った。

「とお——！」  
五人は軽々と飛び降りて、恵理子と、彼女を取り囲む一団の前に立ちほだかった。

「出たな、ティンカーV！<sup>ファイヴ</sup>」  
「ティンカーV？」

訳の判らない恵理子が、混乱して呟いた。  
しかし、どうやら展開は恵理子の疑念を無視して更に進行して行く気配を感じさせた。

「ふ——」  
真中に立った、赤の少女が余裕を持って微笑むとポーズを決めた。

「ヴィーナスレッド！」  
それに続いて残りの少女たちが次々とポーズを決めつつ名乗っていた。

「アマゾネスブラック！」

「エンジェルホワイト！」

「マーメイドブルー！」

「フェアリーピンク！」

「我等、美麗戦隊——」

全員が個々に名乗りを上げると、再び赤装束の、最初にヴィーナスレッドと名乗った少女が声高らかに言った。

「ティンカーV！」

五人揃ってポーズを決めて、見事なハーモニーでその恥かしい名を誇らしく口にした。

“な、何？”

その光景に、恵理子は戦慄していた。

“また、訳の判んないのが出てきたア——”

「その女の人を離せ！」

ずい、と人差し指を突きつけた、マーメイドブルーと名乗った青装束の少女が言った。

「そうは行くか、チューチュー！」

蛸頭の怪人が言った。

「この女は藤枝教授に新型ウィルスを完成させる為の大事な人質だ。おめおめと貴様等に渡せるものか！」

「やはりね」

ヴィーナスレッドがニヤリと笑いながら言った。清く正しく美しい、それはまさしく“正義の笑顔”だった。

「ならば、尚の事、彼女を渡す訳にはいかないわ。藤枝教授も必ずわたし達が救い出して見せるから」

「チューチュー、残念だったな！」

怪人が大袈裟なアクションとともに叫んだ。

「今日が貴様等の最後の日だ。我々デスハードにはむかうティンカーV、タコとスカンクの合成獣、このスカンタコ様が引導を渡してくれる、チューチュー！」

「スカンタコ？」

恵理子が思わずその名を復唱した。何と言う名前であろう。

「何か文句でも有るのか？」

その異様な面相をこちらに向けたスカンタコに、恵理子は口を硬くつぐんで左右に首を振った。実際、文句など有る筈も無かった。この外見にこれほどハマった、似合いの名前は他に有るまい。

「行くぞ、ティンカーV。者ども掛かれ、チューチュータコカイナ！」

スカンタコの命令一下、戦闘員達が見事なフォーメーションで可憐にして凜々しき五人の乙女達に襲い掛かった。

「ふ——」

再び“正義の笑顔”を垣間見せたヴィーナスが、余裕を持ってその一団を迎え撃った。

そして——

「どこかお怪我は有りませんか？」

「——ええ」

エンジェルホワイトの気遣いに、恵理子は呆然と答えるばかりだった。

「もう大丈夫です、何も心配はございませんわ」

「有り難う御座います——」

殆ど虚脱状態の恵理子は、相手の言うがままに答えるより他は無かった。

「手強い相手だったね」

マーメイドブルーの感想に、一同が深々と頷いた。

「流石に今までのようには行かないようだね」

「だけど、頑張っちゃうんだモン」

静かにのたまうアマゾネスブラックにフェアリーピンクが頼もしく答えた。

「これからも、苦しい戦いが続くけど、みんな、頑張つてね」

リーダー格らしいヴィーナスレッドの一言に、メンバー全員が力強く頷いた。

美麗戦隊の乙女達の活躍により、また一つ悪の野望は潰え去った。

しかし、彼女たちに安息の日々は無い。

暮れ行く夕日に向かって手を腰に立った五人の姿を、恵理子は自失  
呆然と眺めるしかなかった。

愛と正義の美麗戦隊！ 【3】

「一体何だったのさ、昨日のアレは——」

某スペシャルの取材班が目撃した光景に勝るとも劣らぬ、信じられないような出来事を体験した翌日、藤枝恵理子は晴れて出勤第一日目を迎えたのであった。恵理子の目の前に聳え立つ白亜の学び舎。

“忘れよう”

気が滅入りそうな自分に言い聞かせると、恵理子は今一度気持ちを入れ直した。

“ここがわたしの夢を叶える青春の晴れ舞台——”

私立天国学園。

“これで今日からわたしも憧れの、世にも名高きあの『高校教師』なのね！”

少子化で免許を取ってもおいそれとは職に就けず、教師も待機期間を経て漸く本番に臨めるこの御時世、遂に巡って来たこの感動の一時に、恵理子は胸を躍らせて弾むような足取りで歩を進めて行ったのである。

「皆さん——」

教壇に姿を現した、新米教師の初々しい姿に居並ぶ三年A組の面々は如何にも物見高い期待感で無邪気にざわめいていた。

「本日から二年三年で古文を担当させて頂きます、藤枝恵理子です、宜しく」

おお、とクラス一同がどよめいた。

「まだ新米だから、イビつたりしちゃダメよ」

恵理子の、中々度胸の据わった冗談に、笑い声が起こった。

「先生——」

男子生徒の一人が如何にも何かを狙ったように、勢い良く手を上げた。

「ハイ、その君！」

恵理子も中々のノリでその生徒を指した。

「彼氏、居ますか？」

「ち、ち、ち——」

いきなりの質問に、恵理子が余裕の表情で指をスウィングさせた。

「甘い甘いぞ」

恵理子も中々楽しんでいる。

「そう言う、プレーンな質問はとっくにお見通しよ」

恵理子の切り返しに、クラス中がどっと受けた。

「先生も昔、おんなじ事聞いたんだから。修行が足りんぞ、もう少し工夫してから出直しなさい」

新米教師藤枝恵理子の授業第一日目は中々好調な滑り出しのようだった。

「ねえねえ、今度の先生、ちょっとイイ感じじゃない？」

「うん、なんか、カワイイよね」

などとクラスのうちこちで恵理子の値踏みが行われる中で、違った感想を胸中に抱いた女生徒が一人。女生徒達の中でも際立って美しい生徒だった。

“——あの女性”

彼女こそ、人呼んで“天国学園の女神様”こと生徒会長、神愛美その人であった。

“間違いないわ。昨日の——”

## 愛と正義の美麗戦隊！ 【4】

昼休み、体育館の裏側に五人の女子生徒が集まって何やら話し合っていた。見た所、不良生徒が下級生を呼びつけるのに適した場所だが、ここに集まった五人はそんな事は無い。先輩は後輩を可愛がり、後輩は先輩を心から慕っているから大丈夫である。強い絆で結ばれた、清く正しく美しい、仲良しこよしの五人組なのだ。

「ええ、ウツソー」

元気で素っ頓狂な声を上げたショートカットのこの娘は一年B組“水泳部の人魚姫”こと海原水魚<sup>みな</sup>である。

「嘘じゃないわ」

愛美が答えた。

「まさか、昨日の女の人がうちの学校に来るなんて——」

二年A組、自称“華麗なる新体操部の白い天使”天野翔子が呟いた。「どーするの、ねえ、どーするの？」

如何にも頼りなげにオロオロしているのは“園芸部の妖精”と呼ばれる上級生の男子のアイドル一年C組、花園妖子。

「どーしよー。センパイ、どーしよー」

妖子に黙って肩を竦めて見せた、男子の制服を艶やかに着こなす、豊かなバストが誇らしげな長身の女生徒は“弓道部の女傑”二年B組、荒井勇氣である。一年女子生徒の憧れの“お姉さま”だった。

「だけど、好都合じゃない？」

既に考えを纏めていたらしい愛美が、一同に頼もしく言った。

「藤枝先生はデスハードに狙われてるのよ。これからも狙われる怖れは有るわ。学校に居てくれれば私達も守り易いし」

「でも、ボク達の事がばれたりしないかな」

「大丈夫よ」

水魚の疑問に、愛美が力強く答えた。

「まさか一介の女子高生が正義の味方なんて、現実にそんな事が有

るなんて思ったりしやしないわよ。それに、生徒は数え切れないほど居るのよ。私達だけに目を付けたりするのはよっほどの慧眼の持ち主でなきゃ、無理よ」

「そうですわね」

余裕の物腰で、翔子が頷いた。

「言われてみればその通りだし、神先輩がそう仰ってるんだもの。私は信頼しておりますよ」

「あ、妖子も——」

翔子の言葉に、妖子も追い縋るように続いて手を上げた。

「モツチロン、ボクも。ユーキ先輩も——」

「ええ」

水魚の元気な一言に、勇気も同意した。

「先輩は、私達みんなのリーダーだから」

勇気の静かな一言に、皆力強く頷いた。

「みんな——」

仲間たちの信頼に、愛美が感無量と言った笑顔を見せた。

「しっかりしなくちゃ」

愛美は益々決意を新たにした。

「わたしはリーダーなんだから。今度は私がこの子達を纏めていかない——」

自分をここまで慕ってくれる素晴らしき仲間達に、愛美は胸が熱くなった。

「そうよ、もう、姉さんたちに頼ってた頃とは違うんだから。いつまでも信頼じゃなく、信用されるリーダーにならなきゃ」

先発登板に大抜擢された新人ピッチャーのような決心と共に、神愛美は——ティンカーVのリーダー、ヴェーナスレッドは今一度力強く胸中に呟いた。

## 愛と正義の美麗戦隊！ 【5】

神愛美。

彼女は日本人ではない。それ所か、人間であるかどうかすら判らないのである。彼女の父、考古学者の神教授は今を去る事十数年前、エーゲ海の孤島で発掘調査を行っていたのだが、その際に謎のタイムカプセルを発見、中には三人の女の子が眠っていたと言う。一体何を考えての行動か、その動機も良く判らないが神教授はそのタイムカプセルと三人の女の子を引き取り、自分の娘として育てたと言うのだ。果たして何故教授が彼女達を引き取ったのか、法的にそれが許されるのかも良く判らないが、兎も角それが事実だった。その事実を二人の姉とともに聞かされた時には、愛美はシヨックの余り何も判らず、言葉を失った。彼女たち三姉妹は、神話に名高いティターンの主神、ゼウスの三人娘だったと言うのである。

長女勝代の正体は、戦の女神アテナ。次女観月<sup>みつき</sup>は狩猟の女神アルテミス。そして愛美は愛と美の女神アフロディーテだと言う。

そうして、三人は地球侵略を狙う宇宙の邪神、クトゥルーとその一族を相手に死闘を演じたのであった。

“……ヴィーナス……”

愛美は、胸に輝くハート型のペンダントを握り締めた。

元々ヴィーナスと言うのは愛美が操縦する鋼鉄女神の名前である。かつて彼女とともに戦った、掛け替えの無い大切なパートナー。

“——見ててね、ヴィーナス”

愛美は今でも忘れない。

あのヴィーナスの、三機の鋼鉄女神たちの壮絶な最後の戦いを。大空に禍々しい黒雲が広がり、異世界の邪神を召喚する暗黒ゲートが今正に開かんるところだった。流石のオリンポス三姉妹にも最早どうする事も出来ない。出来る事と言えば、鋼鉄女神三機を宇宙空間で爆破させ、エネルギーを中和させて暗黒ゲートを消滅させる

事だけである。

「ゴメンね、ヴィーナス。他に方法は無いの——」  
コックピットで、愛美は呟いた。

「だけど、私たちだけじゃ、あそこまで行けないから。行っても何も出来ないから。だから——」

愛美は涙を流し、命を賭けて供に闘って来たパートナーに語りかけた。

「ゴメンね。あなたを巻き添えにしちゃうけど、許してね。一緒に、行ってくれるわよね——」

しかし、愛美へのヴィーナスの答えは。

『NO』

コンソールディスプレイに表示された、ヴィーナスのメッセージに愛美は小さく息を呑んだ。

「ヴィーナス？」

そして——愛美の体が操縦席から浮き上がった。

「何、どうしたの？」

自分の意思を無視して強制的にパイロットをコックピットからフェードアウトした鋼鉄女神を、愛美は不安げに見上げた。

「——ヴィーナス？」

既に勝代と観月もそれぞれの愛機からフェードアウトして地上に降りていた。恐らく、愛美と同じく強制的に。

「姉さん？」

「愛美、観月——」

「お姉も愛美も強制フェードアウト？」

「どう言う事なの、これは？」

「私にも——」

愛美の疑念に、勝代も観月も首を捻るばかりだった。

「ヴィーナス、どうしたの、ヴィーナス？」

“愛美——”

物言わぬ機械のヴィーナスが、自分の問い掛けに答えたように愛美

には思えた。

“有り難う——”

無表情な鋼鉄女神が、小さく微笑んだようにさえ見えた。

“楽しかった。一緒に戦えて幸せだった。これからも忘れないでいて、私の事を——”

「ヴィーナス……？」

“忘れていてもいい。譬え普段は忘れていても、時々思い出しにくれさえすれば。供に闘ったあの日の事を、振り返ってくれる日が一日でも有れば。記憶の片隅にでも私の存在を残してくれていれば——”

ふと、不吉な予感に捕らわれた愛美は、血相を変えてヴィーナスに問い詰めた。

「何、あなた、一体何を考えているの——？」

“——幸せにね、愛美”

それは恐ろしい予感だった。

「ヴィーナス、やめて。馬鹿な事はよして！」

焦燥に駆られた愛美が、必死にヴィーナスに訴えた。どうやら愛美だけではなく、観月と勝代も同じであつたらしく、それぞれの鋼鉄女神に必死で語りかけている。

「アンタ何考えてるのよ、ダイアナ。約束したじゃない、あたし達最後まで死ぬも生きるもずっと一緒だって」

「フェードイン。これは命令よ、従いなさい、ミネルヴァ！」

しかし、三機の鋼鉄女神はパートナーの制止を振り切るように算定推力三二〇〇tの外燃型反重力ロータリー・ターボを始動させ、浮上を開始したのである。

「ヴィーナス……」

愛美はヴィーナスを、伴に戦ってきた大切なパートナーを悲痛な眼差しで見上げて叫んだ。

「お願い、ヴィーナス。戻ってきて。私を置いて行かないで——」

「ミネルヴァ……」

「バカ、ダイアナのバカあ！」

天に向かって一直線に上昇する三機の鋼鉄女神を見詰めるだけで、  
愛美達には他に何も出来なかった。

そして――

天空に小さな閃光が輝き、禍々しく空を覆っていた暗黒ゲートは消滅した。

かくて、地球の平和は保たれたのであった。

しかし、その代償に、勝利と引き換えに彼女たちが失ったものはあまりに大きかった。

三姉妹は、肩を寄せ合って涙した。

かくて無事地球を護り切った三女神だったが、恙無く平和が戻ったにも拘わらず、その後神教授は妻共々忽然と行方をくらましたのである。姉たちは、兄、つまり神教授の真の息子、竜也とともに両親を捜す旅に出たのであった。

しかし、この世に悪の種は尽きる事は無い。

兄弟が両親の行方を捜して旅に出るすぐに、父の友人と言う真崎教授なる人物から愛美に連絡が入った。今、デスハードと名乗る悪の秘密結社が密かに暗躍を初め、どうやら神教授の失踪はそれと関りがあるらしいと言うのである。

愛美は戸惑った。既に彼女は先の戦いで女神としての力を使い果たし、今では只の女子高生に過ぎないのである。

真崎教授は生化学、量子力学の第一人者であり、この程装着した人間の力を強化する個人装備用新兵器、フィット・ブースターを開発したと言う。実験の結果、この強化服は男性よりも女性の方がシンクロ率が高く、安全に力を発揮できると言うのだ。しかも、そのシンクロ率も個人差が有り、人によって発揮できる能力はかなり開きがあった。折りしも、高校二年の後半、只でさえ生徒会長に選出されたばかりで忙しい上に、フィット・ブースター装着に相応しい者、それも信用に足る仲間を捜すのはかなりの難行だったが、それでも愛美は申し出を受けた。

“ ヴィーナス——”

自分を、地球の平和を護る為散っていった掛け替えの無いパートナの想いに報いる為、愛美は年度を越して新入生まで勧誘した結果、何とか四人の仲間を見つけ出し、ここに美麗戦隊ティンカーVが結成されたのであった。

この戦隊名についても色々と紆余曲折が有った。最初、『美少女戦隊』という案も検討されたのだがあまりにストレートで捻りが無いのに加え、他にも有りそうな、と言うより、この“美少女戦隊”なる言い方自体が固有名詞ではなく、一般名詞のような響きがあるの、で別の名前に決定したのである。このジャンルの草分け的な『美少女戦士』も既に存在しているが、今ではそれが何となく世間一般に流布しており、それは恰も、『女コック』という、一見固有名詞ではなく、少女漫画雑誌全般を指す形容詞のような誌名の雑誌が実在するのと同じような語感かも知れない。

“ 見ててね、ヴィーナス”

愛美は、手の中のハートのペンダントを握り締めた。これこそ鋼鉄女神の起動キーパーツ、今となってはヴィーナスが愛美に残した唯一の形見だった。観月が肌身離さず首から下げている三日月型、勝代が身に付けている剣の形のペンダントも、それぞれの鋼鉄女神のキーパーツである。

“ 私、頑張るから——”

愛美がティンカーVのリーダーとして“ヴィーナス”を名乗ったのは、当然今は無きパートナーをしので選んだ名前だった。

“ あなたの分まで——なんて、わたしには無理だけど、わたし、一杯頑張る。最後の最後まで、絶対諦めたりしないから。だから私の事、見守っててね、ヴィーナス”

手の中のペンダントを見詰め、今もこの大空のどこかで自分を見守ってくれているであろうヴィーナスに、愛美は直向きな決意を届けたのであった。

そして、両親の消息を追って今もどこかに旅を続ける兄と姉たち——

“ ミネルヴァ、ダイアナ、どうか私の代わりに姉さんたちを見守ってあげてね ”

三機——三人の鋼鉄女神たちが、空の上から自分たちに微笑んだように愛美は思った。

愛と正義の美麗戦隊！ 【6】

五時限目が始まって幾らしもない、昼食が腹にもたれて気分も虚ろな昼下がりの三年A組。神愛美のブレスレッドが小さく明滅し、バイブレーションが起こった。

“もうこんな時にイ——”

愛美は忌々しげに舌打ちした。

“どうせだったら、授業が始まる前に呼び出してよ！”

そうは言ってもこのまま放っては置くと云う訳にもいくまい。

“しょうがないわねえ”

意を決した愛美は、胸を押さえて苦しげな呻き声を洩らした。

「ああ——」

机の上に蹲った愛美を、クラス一同、何とも言えぬ目で眺めていた。

「——どうした、神」

いつもの事だと大体心得ている教師が、またかという顔で愛美の方を見た。

「す、すいませえん——」

胸を押さえた愛美は、その美しい顔を苦しげに歪めて教師を見た。

「急に、差込が——」

その一言に、教室中がはあ、と溜息を洩らしたが、愛美としては必死である。

「そうか、大丈夫か？」

次の愛美の答えも百も承知の日本史の教師が、ウンザリと言った調子で訊ねた。教師の、と言うよりクラス全員の冷たい視線を物ともせず、これも世の為人の為、そして何より正義の為、愛美は必死の演技で訴えていた。

「あのお、苦しくて……」

「そうか、良く判った」

愛美が何かを言いかけると教科書で顔を隠したまま、先手を打つよ

うに掌を動かしながら教師が言った。

「無理はするな。後は任せて早退した方が良いな」

下手に押し問答して時間を潰すのもアホらしいので、追い出すようにさっさと言い捨てた。

「すみません、それじゃ、お言葉に甘えて……」

「大事にしるよ」

早い所済まして厄介払いしたいと言う胸中がアリアリの、平淡な口調だった。

その頃――

二年A組の教室。

「センセエ、わたくし、ああ――」

大袈裟に身悶えする天野翔子に、はー、と溜息をつきながら教師が言った。

「――早退か、天野？」

一年B組。

「先生！」

元気良く手を上げた海原水魚が、額に手を当てている。

「気分悪いんですけど――」

一年C組では、花園妖子が――

「あ、あの、あのね、先生――」

モジモジしながら困惑していた。

そして、二年B組――

「あ、荒井――？」

長身をもたげるようにこちらを窺う荒井勇氣に、教師が後退るように対していた。

「申し訳ありません、どうも気分がすぐれないもので――」

「お、落ち着け、荒井。先生と良く話し合おう」

勇気の全身から発散する闘気に追い詰められた教師が、腰を抜かさなばかりに浮き足立っていた。黒板に背中を押し付けて、脂汗を流す教師に、勇気は迫って行くような気合いで応じた。

「せ、先生はいつでもお前の味方だぞ。だ、だから――」

「授業の途中で大変心苦しいのですが、早退させて頂けないでしょうか？」

「わ、判った、判ったから早まるんじゃ無い、荒井――」

それぞれ何とか当面の障害を乗り切って、人目につかない体育館の裏に集合した五人の女子生徒たち。ここが集合場所なのだが、時々別口のエスケープが先着している事も有って、中々難しい。その上、なにやら穏やかでない用事で生徒同士の呼び出しが有ったりもする場所だから、更に注意が必要である。

「遅おい、何やってますの？」

眉根を吊り上げて問い詰める翔子に、最後に到着した水魚が明るく舌を出して頭を下げた。

「ゴメエン、センサー、中々判ってくれなくて――」

見るからに健康優良児と言った外見に加え、素直で押しも強く無さそうな水魚では仕方ないのであろう。

「全員揃ったわね」

愛美の一言にメンバーが頷いた。

「博士、全員揃いました」

携帯を手に、愛美が報告した。

『そうか、みんな、授業中招集をかけたりにしてすまんが、すぐに向かってもらえるかね――』

見える筈も無いのに、携帯電話の向うの真崎博士の苦しげな答えに、一同が笑顔で頷いた。

「それじゃ、みんな——」

「おおー！」

愛美の合図に、ビシツと隊列を組んだティンカーVのメンバーが誇らしげにブレスレットを掲げた。

神愛美が叫んだ。

「赤色麗装美神変！」

荒井勇気が叫んだ。

「黒色麗装女傑変！」

天野翔子が叫んだ。

「白色麗装天使変！」

海原水魚が叫んだ。

「青色麗装人魚変！」

花園妖子が叫んだ。

「桃色麗装妖精変！」

五人の乙女の清らかな肢体に、柔らかく鮮やかな、色とりどりの輝きが纏いついて行く。両手に、両足に、腰に、胸に、そして、顔に

そこには、艶やかな五色の装いに身を包んだ愛と正義の少女たちが、瞳と頬を輝かせて立っていた。

清く正しく美しい、いつもの“正義の笑顔”を浮べて、ヴィーナスレッドが叫んだ。

「それじゃあみんな、行くわよー！」

「おおー！」

## 登場、悪の大幹部！ 【1】

「全く、頼りにならない連中よねえ」

撮影スタジオ位のスペースに、無理矢理張りぼてじみた大仰でチープな内装を施した狭く苦しい空間で、奇天烈な黒装束に身を包んだ一団に囲まれた、これまたイカレタ服装に厚化粧の女が踏ん返り返って周りに傳く連中を睥睨していた。その好いたらしく肉付きの良い女体を、革張りのボンテージ、一つ間違えればビザールファツシヨンかというような際どい衣装で締め付けたその女は。

「オーホホホホホ」

しなを作るような手つきと共に、その外貌に似つかわしい笑い声を響かせるのは、凶悪帝国デスハードの大幹部、その名は――

「だけど、これからは違うわよ。このムチムチプリンセスが直々にこの日本支部を預かるんだからね、今までみたいないい加減な事じやあ済まさないんだから」

この、どうしようもない名前の大幹部、ムチムチプリンセスも、良く見てみればまだ若い娘、高校生くらいの年齢のようである。これから先のある若い身空で何をどう誤ったのか、傍目から見れば気の毒ではあるが。

「大体、あんた達には日本攻略のポリシーってモンが全然無いのよねえ、ホント」

大幹部のお叱りに、下っ端たちはひたすら恐れ入るばかりだった。

「何の為に日本を、具体的にどんな風に支配するつもりなの？」

下っ端たちは顔を見合わせた。まさか、そんな高尚な質問を受けるとは思っても見なかった為、全く考えた事も無かったのだ。これこそ日本支部伝統の身内の馴れ合い、言われた事だけソレナリにこなせば報酬に繋がる、俗に“給料泥棒”と呼ばれる日本型経営の責任転嫁方式であった。

## 登場、悪の大幹部！ 【2】

「あー、もー、これだから、日本支部はいつまで経っても全然進展が無いのよ。いい事、良くお聞き」

人差し指をビシツと立てて、ムチムチプリンセス――ハッキリ言っ  
て嫌になりそうだが、確かに本人を前にすればこれ以上無い位似合  
いの名前では有る――が声の調子を1オクターブ上げた。

「いい事、この日本の利用価値はまず財政面。何だか最近不況とか  
言ってるけど、まだまだジャパンマネーは世界的な通貨として重宝  
されてるの。でも、我々にとってはそれ程重要な事でもないわ。我  
がデスハードが日本を最重要拠点の一つとして本腰を入れる真の理  
由、それは――」

今まで、そんな難しい事を考えた事も無かった一回は、このとてつ  
もなく恥かしい服装と名前の大幹部の高説に、ほお、と感心して息  
を呑んだ。

「何と言ってもハイテク最先進国、技術立国ニッポンの科学力よ」  
先程の国際的な話題に続いて今度は如何にも悪の組織らしいこの説  
明。この新任の大幹部は只者ではない。名は体を現すと言う言葉を  
力一杯体现する天衣無縫なチャレンジャーであるに加えて、人は見  
かけに寄らぬものと言う格言の権化のような女性らしい。一見矛盾  
する（？）二つの格言を巧みに使いこなす（？）恐るべき大幹部で  
あった。

「どうしてロクに資源も無いこんな国が何でG7とか何とか言っ  
て先進国に名を連ねているのか、その“ヒケツ”は言うまでも無く世  
界に轟く高等科学技術、メイド・イン・ジャパンを世界的なブラン  
ドにまで高めたこの科学力なのよ」

ほお、と溜息をつくような雰囲気のアジトの中一杯に広がった。

「そしてそれを支えているのは国家プロジェクトでも一部の大学や

大企業でもない。地場産業の地道な努力と実力こそがこの先端技術の底辺なの。博士号も肩書きも無いサラリーマンがノーベル賞取るような国なのよ。いい事、その科学力は点じゃなく面、つまりこの国全体が作り出しているの」

下っ端もプリンセスの演説に聞き入っていた。部下たちの、お追従ではない心底からの尊敬の眼差しに気をよくしたプリンセスは、腰に吊っていた鞭を手にすると勢い良く引っ張ってビシッ、と刺激的に小気味良い音を響かせた。

「つまり、これを利用しようと思ったたら出来るだけ相手を刺激せず、自分たちが支配されていると言う意識さえ抱かせないようにして、あいつ等の技術だけをゴツソリ頂いちゃうように仕向ける必要が有るのよ」

おおーと、遂に拍手まで沸きあがり、まあまあ、とばかりに聴衆を手に制したプリンセスは益々上機嫌で演説を続けた。

「つまり、力押し of 作戦じゃダメって事。連中が知らない間にその中に入り込み、必要な技術を作らせる。自分たちが悪の組織に利用されている事も気付かずにつせと仕事に打ち込んで、知らない間に悪事の片棒を担がされているという寸法よ」

おお、とか、スゲエ、とかいう感歎の声がそこかしこに上がった。

「素朴な町工場の職人さんの職人気質を利用して世界制服の超兵器を完成させるヒレツ極まりない作戦。これよ、これぞまさしく王道を行く悪の真髄だわ。ああ、何て悪どいのかしら——」

プリンセスの瞳には、頭かに自分の才能に酔い痴れた者のみに許された、濃厚な輝きが宿っていた。

「いい事、これから私が指揮をとる以上は今までみたいなチャランポランな事は許さないからね。このわたしの、セクシーダイナマイツでグッドシエイブな、辛抱堪らん悩殺ナイスバディにかけて失敗は許されないのよ。キャッチフレーズは“天使のように繊細に、悪魔のように大胆に”よ！」

手下たちは感極まったように声を上げ、プリンセスは手にした鞭で

床や壁や何か良く判らんセツトをオホホホホ、とビシビシ打ちま  
くり、アジトには時ならぬ盛り上がりが巻き起こった。

### 登場、悪の大幹部！ 【3】

「と言う訳で、このわたし、ムチムチプリンセスの日本支部における最初の作戦は」

ノリの良い盛り上がり気に気をよくしたプリンセス、腰に手を当て、もう一方の手で鞭を突き出して上機嫌でポーズを決めた。目に強い輝きを宿したプリンセスの如何にもと言ったその姿を凝視する一同が、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「名付けて、『仁義無き戦い“作戦”よ！』」

シーン、と静まり返った聴衆に対し、プリンセスは何かを期待する辛抱強く待っていていれば次には何かが起こるだろうと言う趣で、鞭を突き出したポーズを保って静止したまま強い眼差しを向けていた。しかし、一旦呼吸を外してしまえばノリを戻すのは難しい。

「な——」

どうリアクションして良いのか判らず、下っ端たちは顔を見合わせ、戸惑っていた。

「何よ何よ——！」

折角のネタフリがもの見事に滑ってとっても困っちゃったプリンセスが、鞭をビシバシ打ちまくり、両足をバタつかせて、照れ隠しのように叫びまくった。その姿が何とも言えず愛くるしいばかりであった。

「ナニよ、その反応は——！」

「しかし、プリンセス——」

「ナニよ——」

御怖れながら、と言う物腰で下っ端の一人が大幹部に、用心深く御注進に及ぶと、プリンセスはきつい眼差しで応じた。

「先程の御卓説と、只今の作戦の関連性が今一掴めないのですが……」

「仕方ないわねえ——」

ふ、と気を取り直したように余裕の一息を洩らすと、プリンセスは再び威厳（？）を取り戻して部下達にニヤリと笑って見せた。

「ホント、ニブい連中ねえ。これだから日本支部はダメなのよ。いい事、地場産業の中小企業を把握する為にはソレナリのネットワークが必要なの。それは勿論インターネットなんてシロモノじゃなく、地域に根ざした、人と人との触れ合いを基盤にしたコミュニティなのよ」

はあ、と一応頷いて見せた下っ端どもに、プリンセスは続けて作戦の主旨を説明した。

「その、人と人とを繋ぐ日本伝統のネットワーク組織、日本のクライムソーシアルを握る、義理と人情で渡世を営む裏の商工会、これこそ世界に知られたジャパニーズ・マフィア、かの名高き『ザ・ヤクザ』なのよ！」

今一反応は鈍いが、それでもおお、と御義理のように一同はどよめいた。

「いい事、私たちにとって必要なのは実力有る技術者よ。金だけ取って何もしない親方ヒノマルのゼネコンじゃあ役に立たないの。かと言って、どこに転がってるか判らないお宝を拾おうと思ったら、一々わたしたちが探し回ったって見付かるかどうか判ったモンじゃないし。となると、その全てを把握している、それも地域と密接に關った、世間の裏も表も把握した地元のマフィアに食い込む事が一番手っ取り早い訳」

再び、話に引き込まれつつある手下たちに、プリンセスは説明を続けた。

「だからこそ、彼等ヤクザを使って町中の中小企業を把握し、情報を常に仕入れ、必要に応じて部品や技術を発注するの。洋の東西を問わず、犯罪組織は常に真面目な一般市民の裏側にへばり付いているものなんだから」

おお、と下っ端たちが再びどよめいた。義理や追従ではない如何にも自然なその反応に、プリンセスも上機嫌でポーズを決めた。

「と言う訳で、その為のターゲットをこれから探すのよ」

「具体的には？」

「フフフフ、それはねえ——」

部下の反応に満足げに笑みを浮べたプリンセスが、やけに思わせ振りに顎を引いて、上目使いの余裕の物腰で答えた。

「やっぱり、狙うは“ホンモノ”のヤクザよ」

「ホンモノ、ですか？」

「そう、ホンモノ」

またまた踏ん返り返って鞭を突き出したプリンセスだった。

「いい事、そう言った地道な情報は、地道な男稼業に精を出してる辛抱強い“ホンモノ”のヤクザでないとダメなの。経済極道かなんか知らないけど、金の臭いにはっか敏感で、金儲けに目の色変えてこれ見よがしに外車なんて乗り回してる総会屋とか、ネットに出会い系サイト立ててあっちこっちのブログにアドレス貼りまくってるITヤクザとか何とか言う連中じゃあ役に立ちやしないのよ。いい事、昔かたぎのホンモノのヤクザ、義理と人情を秤にかけりゃ、背<sup>な</sup>中で泣いてる唐獅子牡丹、てな“侠客”を探し出して仲間を引き入れるのよ！」

「了解しました」

服装と名前は途方も無く恥かしい本部直属の大幹部、ムチムチプリンセスの具体的な指示に、今までに無くやる気になった手下一同が拳手敬礼を見せた。

「デスハードに栄光有れ！」

「栄光有れ——」

## 登場、悪の大幹部！ 【4】

「藤枝先生——」

「あら？」

廊下で声をかけて来た愛美に、新任教師藤枝恵理子が笑顔で答えた。

「神愛美さん、よね」

「え——？」

まだそれ程顔を会わせた訳でも無いのに名前を呼ばれ、愛美は正直ギクリとした。

「ど、どうして私の名前を？」

「生徒会長さんでしょ、あなた」

恵理子が別に何かを含んだようでもない表情で屈託無く答えた。その様子から察するに今の所、別に愛美の正体に感付いているようではないが。

「それに有名なもの。天国学園の女神様なんだって？」

「え、えーと……」

それでも愛美は内心警戒を抱きながら口籠った。それだけではなく、まともに目の前で“女神様”などと呼ばれては流石の愛美も決まりが悪い。

「それに——」

いよいよ何かを繰り出そうと言う顔付きで、恵理子が言葉を継いだ。純真で素直な正義の少女である愛美は如何に隠そうとも内心の動揺を隠し切れない。追い詰められて絶体絶命の体である。

「早退の常習犯だった？」

「あ、あは——」

正直な愛美は、一まずホツと一安心と言った顔でガクつと肩から力が抜けた。

「どうしたの、顔色悪いわよ」

恵理子が心配そうに言った。

「だ、大丈夫です——」

「ダメよ、無理しちゃあ」

恵理子の気遣いは本気のものである。余程愛美の様子がおかしいのである。正直な娘だった。

「いいえ——」

気を取り直して愛美が答えた。

「もう、この通り、全然元気。大丈夫ですから」

おどけて力瘤のポーズを取って見せた愛美を、ホツとしつつも、おかしそうに恵理子が見守っていた。

「どうやら大丈夫みたいね——」

「ええ。御心配お掛けしました」

礼儀正しく頭を下げた愛美を、恵理子が微笑ましげに見詰めていた。

「どうやら早退の必要は無いみたいね」

「やだあ、もお、先生の意地悪う」

そしてその頃、すぐ下の一階の渡り廊下では——

「あーあ——」

切なげに溜息をつく海原水魚みなに、天野翔子が気遣わしげに声をかけた。

登場、悪の大幹部！ 【5】

「海原さん、何か悩み事でも？」

「うーん、悩み、だよねえ……」

塞ぎ込んだように溜息を連発する水魚に、翔子は益々心配になってきた。

「どうしたの、海原さん。悩み事だったら相談に乗りますわよ」

「うーん——」

髪の毛を掻くようにペロツと舌を出した水魚は、片目をつむって唸るばかりだった。

「シヨーコ先輩のお心遣いはとっても嬉しいんだけど……こればかりは……」

「何よ、海原さん」

翔子がむっ、と眉根を吊り上げた。

「ち、違う違う、そうじゃないんだ——」

機嫌を損ねた翔子に、水魚が慌てて手を振って見せた。

「しょうがないなあ……それじゃあ……」

水魚は再び溜息について話し出した。

「先輩、ボクの事、どう思う？」

「どう？」

質問の意味が判らず、翔子がきょとんと水魚を見返した。

「どう、ですの？」

逆に翔子の方が聞き返したのも、不思議は無い。

「どう、とは、どう言う意味ですの？」

「だから……」

水魚が頭の後ろで両手を組んで唇を尖らせた。

「ボクって、あんまり可愛く無いでしょ？」

「はあ？」

益々意味が判らず翔子が戸惑って言葉を失った。

「可愛く……」

何だか良く判らないが、妙に切なげな水魚の眼差しに焦った翔子が、慌てて答えた。

「そ、そんな事——」

慌てて取り繕う翔子を、水魚が恨みっばい目で見詰めた。

「か、海原さんはとっても可愛いですわ」

「ホント？」

「当然、ホントですわよ」

「具体的には？」

「ぐ、具体的？」

そこまで問い詰められても翔子には咄嗟に答えられない。

「え、えーと……」

目が泳いで、何とかこの場を切り抜けようと答えを探す翔子を、胡乱げな顔で水魚が見ている。

「そ、そうそう、元気で活発で、気さくな所とか——」

顔の横で両手を合わせてニッコリ微笑む翔子を、益々問い詰めるような目で水魚は窺っている。

「明るくてサツパリした性格なんて、もー、サイコー」

「もっいいよ」

水魚が今一度、ハー、と溜息を着いた。

「やっぱり、ボクって可愛くないんだ」

「ちょ、ちよつと——」

翔子が慌てて言った。

「可愛くないって、そんな事は……」

「判ってる——」

クルツと向きを変えた水魚が、再び両手を頭の後ろで組んで見せた。

「可愛いつて言うのは、男の子みたいで爽やかだとか、そう言う意味なんですよ」

「え、えーと……」

まともに凶星、ズバリ胸中を衝かれて流石の翔子も返す言葉が無くなって沈黙した。

登場、悪の大幹部！ 【6】

「だから言ったのに。ボクの悩みの相談なんて無理だって」

「あははは——」

力無く翔子が苦笑いを洩らした。

「ボクね——」

俯きながら、水魚が呟くように言った。

「気にしないようにしてるんだ、女の子らしくないって事は」

それはいい事ですわ、と思わず言いかけて、翔子が危つく言葉を飲み込んだ。

「でも、ヤツパリ気になるよね。だって女の子なんだモン」

「海原さん——」

水魚の気持ちを慮って、翔子が何かを言おうとしたが、言うべき事をまとめていなかったらしく後が続かなかった。

「海原さんは……」

そんな翔子を、水魚が笑顔で見詰めた。

「ありがとう、ショーコ先輩」

「海原さん……」

水魚がまたまた、ハー、と溜息を着いた。

「いいよね、みんなは女っぽくて」

「みんなって、わたくし達みんな？」

自分を指差して訪ねた翔子に、水魚が黙って頷いた。

「そんな事無いですわ」

翔子が笑って言った。

「荒井さんなんて、あなた以上に——」

言ってしまったから言い方が悪かったのではないかと翔子はやや口籠った。他人を引き合いに出すのは、何かと問題が有る。

「ユーキ先輩には、自慢のDカップが有るジャン」

「あははははは——」

「あんだけ立派な女の証明が有ったらさ、自分からわざわざ女です、何て宣伝する必要ないじゃん。堂々と胸張って歩けるよ。それに比べてボクなんて……」

水魚は自分の胸を押さえるように手を当てた。

「アレだけ恵まれてたらさ、ボクだって気にしたりしないもの。それに、ユーキ先輩って、何だか凄くイロっぱくない？」

「確かに……」

荒井勇氣。

周りからは女傑だの何だのと呼ばれてはいるものの、クールな物腰が極自然な女性を感じさせる、中々のイイ女なのだ。性別を乗り越えた自発的な意思による女性、所謂Mr.レディなどは本物よりも女らしいなどとも言われるが彼女の場合その正反対、無理に姿形だけ女の体裁を取り繕わなくとも、存在自体が濃厚に女、と言う感じで、その肉体は溢れんばかりの女性ホルモンの分泌量を想像させる生理的な“女”で、これ見よがしに色っぽい男装の麗人なのだ。

「で、でも——」

翔子は何とか水魚を励まそうと必死のようである。

「む、胸だったら、花園さんだって……」

「ヨーコちゃんは充分カワイイよ。胸なんか必要無いでしょ」

幾ら何でも本人が聞いたら気を悪くするであろう。妖子の場合、子供っぽいと言うのが特徴だが、水魚と違って本人は気にしてはいない。

「わ、わたくしだって、そんなに大きい方じゃ……」

「それだけ有れば充分じゃん。もっと欲しいなんて言ったら罰が当たるよ。それに、センパイは女らしいし」

言う事言う事切り替えられて、翔子も言葉に窮してきた。

「天は二物を与えずなんて、絶対ウソだよ。マナミ先輩なんか、胸も大きいし、女らしさも満点じゃん。ボクもどっちか一つくらい欲しかったな。胸だって、ユーキ先輩くらい、なんてゼータク言わな

いから、せめて人並み位の大きさ」

「海原さん……」

「判ってるんだ。自分でボク、何て言ってるんだし、どうしようもないって」

水魚は、立ったまま頬杖を着くような仕草でまたしても溜息をついた。

「こんな自分を変えたくて、女らしくしてみようって試した事もあったよ。でも、ダメなんだ。ガラじゃないのかな——」

吹っ切れない想いを吹っ切ろうとするように、水魚が笑って見せた。「私服でも、スカートなんか全然持ってないし、小さい時から男子と暴れたりスポーツしてる時が楽しかった。でも……」

「海原さん」

「胸の無いのだから気にしないようにって、部活の時なんかは、ボクって流線型だから水泳に向いてるのかも、なんておどけてみたり」  
口さがない連中は、水魚の事を“水泳部の人魚姫”ではなく河童だなどと陰口を叩いたりもする。

寂しげな水魚の笑顔を、翔子が居た堪れない想いで見詰めていた。その時である。

登場、悪の大幹部！ 【7】

「あら？」

藤枝恵理子と一通り話し終えた愛美が、二人の姿を見つけて声を掛けて来た。

「水魚ちゃん、翔子ちゃん——」

翔子と水魚が声のした方に向き直った。

「神先輩」

「マナミ先輩」

「こんにちは」

振り返った二人に、愛美はニッコリと、心温まる“女神の微笑み”を見せた。

“ やっぱり、ステキだなあ—— ”

釣られて微笑み返した水魚が、しみじみと思った。

“ それに—— ”

愛美の豪勢な胸元に視線を落とし、何か吹っ切れないものを抱えたまま、水魚が今一度、ハーと溜息をついた。

「翔子ちゃん、相変わらず綺麗ねえ」

「そんなあ、神先輩ったらあ——」

照れながらも、見るからに嬉しそうな翔子が顔に手を当てて答えた。

「水魚ちゃんはカワイイわねえ」

「え？」

愛美の一言に、水魚が一瞬顔を輝かせた。

「マナミ先輩、ボクって、カワイイ？」

「ええ、とつてもカワイイわよ」

愛美が益々慈悲深く微笑んだ。

「わたし、未っ子でしょ、上ばっかりで、下が居なかったでしょ、だから——」

愛美の誉め言葉に舞い上がった水魚が、無邪気な期待にそのささやかな胸を膨らませて耳を傾けている一方で、翔子は何となくその先が読めるような気がして、正直はらはらしながら事の成り行きを見守っていた。

「こおんな元気でカワイイ弟がいたら、とおっても楽しかっただろうなあ、って」

純真な、全く底意地の悪さや持つて回った嫌味など無い、心の底からの一言だった。

傍で聞いていた翔子が凍り付き、水魚が笑顔を停止させたまま、その場には言葉にし難い冷めた空気が漂った。その、掴み所の無い圧迫感に耐え切れなくなった愛美が、笑顔が徐々に引き攣るのを感じながらも、ひたすら雰囲気や和らぐのを期待して辛抱強く待っていた。

「あ、あの……」

崩壊寸前の微笑みを辛うじて保ちながら、愛美が声を絞り出した。

「そ、それじゃ、ボク――」

ペコリと頭を下げた水魚が、逃げ出すように走り出した。

「失礼しまあす、先輩」

光の粒子を振りまき、手を振りながら妙に遠く感じられる笑顔をこちらに向けた水魚を、愛美が不安と供に見送った。

「あ、廊下を走っちゃいけないね。ボクとした事が――」

正体不明の笑顔と供にスキップで立ち去って行く水魚の摩訶不思議な後姿を、得体の知れない後悔を抱いて見送る愛美だった。

「あ、あの……」

心配な表情でこちらを窺う愛美に、肩を竦めた翔子が両手を広げて首を左右に振りながら、はー、と溜息をついて見せた。

登場、悪の大幹部！ 【8】

「ええー?!」

事の次第を聞かされた愛美が気の毒なくらい狼狽して、やや間の抜けた声を上げた。

「どうしましょう、ねえ、翔子ちゃん——」

そう言われても翔子にも答えようが無い。

「まあ……」

縋り付くような愛美の泣き顔に、翔子が苦笑いで返す。

「仕方無いんじゃないですか？」

翔子の、やや薄情な答えに愛美が益々悲しげにその美貌を崩した。

翔子が慌てて言葉を搜したが、咄嗟には出てこない。

「だけど……」

俯きながら愛美が呟いた。

「だけど、水魚ちゃんがそんなに気にしてるなんて……」

「そうですね」

翔子が救われたように相槌を打った。

「水魚ちゃんの気持ちに気付かずわたし、なんてひどい事を——」

「そんな、先輩」

「仲間の気持ちも判らないなんて、わたし、リーダー失格だわ」

「ちよつと……」

おいおい、と言う風に翔子が掌を上下させた。

「そうだわ——」

愛美が、意を決して顔を上げた。

「水魚ちゃんに謝らなくちゃ」

「先輩、何もそこまで……」

「いいえ——」

愛美は思いつめた顔で力強く言い切った。

「ゴメンね、翔子ちゃん。わたし、水魚ちゃんに謝って来るから」

「神先輩」

そんな、滑稽なほどに生真面目な愛美を、翔子が温かな眼差しで見守っていた。

「それじゃ——」

「先輩——」

“全く——”

やれやれ、と言う風に、翔子が肩を竦めて愛美の後姿を見送った。

“頼もしいリーダーですこと”

皮肉ではなく、翔子は本心からそう思った。

“それに——”

何を思ったのか翔子は、妙に幸せそうな含み笑いを洩らした。

“海原さんて、もしかしたら、誰よりもデリケートで女らしい女の子なのかも知れませんか”

これまた本気で、翔子はしみじみと温かな想いを囁締めた。

## 登場、悪の大幹部！ 【9】

“もお、どおしよお、わたしったら——”

大切なヴィーナスの形見のハートを無意識に握り締めながら、愛美が一年B組の教室に駆けて行った。

「廊下を走ってはイカン！」

「済みません」

途中教師に注意されて、頭を下げた愛美は両手両足を勢い良く振って、走らないように出来るだけ早足で歩いた。傍から見ている吹き出しそうになる姿だったが、愛美は夢中で気にも止めない。わき目も振らず、一目散に一年B組の教室を目指して歩き続けた。

「なあに、先輩」

「水魚ちゃん……」

既に教室に戻っていた水魚を呼び出してもらった愛美が、やおら頭を下げた。当然、水魚は面食らった。

「ゴメンなさい、本当に、ゴメンなさい——」

戸惑う水魚の目の前で、愛美が何度も頭を下げて謝罪を繰り返した。

「——えっと……」

そんな愛美の姿に、困惑の表情で水魚が立ち往生していた。

「ゴメンなさい、水魚ちゃん、わたし、何て事を……」

「もういいよ、マナミ先輩——」

水魚が、両手を振って愛美を制止した。

「ボク、気にしてないから」

「でも……」

「人目も有る事だし——」

周りを気にして見回すように、水魚が言った。ここは水魚のクラスの前、出入り口の脇である。

「こんな所で先輩に——女神様のマナミ先輩に頭を下げさせてたら、

後でボクが何言われるか……」

「あ——」

漸く周りの物見高い視線に気付いた愛美が、口を押さえるように目を左右に動かした。

「ゴメンね、わたし……」

またまた頭を下げかけた愛美が、身を縮めるような仕草で、如何にも申し訳なさそうに水魚を見た。そんな愛美を水魚が力の抜けた苦笑いで見返した。

「水魚ちゃんがそんなに気にしてたなんて知らずに——わたしっから、なんてひどい事を……」

「ホントにいいってば、センパイ」

水魚が蟠りの無い、爽やかな笑顔で言った。

「あれはシヨ——先輩に無理矢理言わされて、妙に意識しちゃっただけだから。それに、マナミ先輩だって、悪気は無かった訳でしょ？」

「そ、それはもう——」

愛美が慌てて首を左右に振った。そんな姿に、先程翔子が思ったのと良く似た感想を抱いた水魚だった。

「だったらもういいよ。アンマリ気にされると、ボク、その方が困っちゃう」

「水魚ちゃん——」

登場、悪の大幹部！ 【10】

「あーあ、海原さんにも困ったものですわ——」

屋上の手すりに凭れながら、翔子が荒井勇気を前に溜息をついた。何かと溜息の多い日であった。

「あの子はピユアだからね」

ポケットに手を入れ、人事のように呟く勇気の姿に、翔子がムツとなつて眉を吊り上げた。実際人事なのだから仕方が無いが。

「何ですの、その態度は？」

勇気が無言で、おいおい、と言うような目を翔子に返した。

「あなた、仲間の事が心配じゃ無いんですの？」

「あたし達が心配する事じゃあ無いだろ？」

「まー、何て薄情な人なんですよ！」

翔子の癩癩に、勇気が苦笑いを見せた。

「それに、あたしは苦手なんだ、その手の話は」

「あなた——！」

人差し指を、指紋が見えるほどにビシツ、と勇気に突きつけた翔子が益々癩を募らせて金切り声を上げた。

「あなたのそーゆー態度があの子を傷付けるんですのよ」

ちよつと待つてよ、とばかりに肩を竦めた勇気に、翔子が容赦無く指弾を続けた。

「あなた、判らないんですの？そもそも海原さんの悩みの原因はあなたですよ」

「——？——ナニ言つてんの、あんた」

「あなたのそう言う、何もしなくなつて私は女だから、つてな無神経で凶々しい態度に、彼女はひどくコンプレックスを抱いてあそこまで悩みが深刻になつたんじゃ御座いませんか。エラそうに、これ見よがしにそんな慎みの無いモノぶら下げて涼しい顔して男装して

るあなたと、直向きな乙女心を抱きしめてどうしようもない青春の  
悩みに翻弄される自分とを引き比べて、海原さん、とおっても傷付  
いてますのよ」「

「傷付くなあ、そう言う言い方」

ふざけて話を混ぜっ返そうとする勇気を、翔子がキツと睨みつけた。

「判った。もう、判ったからカンベンしてよ。反省しますって」

「全く——」

翔子が溜息を着いた。

「あーあ……」

同じ頃、愛美もまた、中庭で花壇を前にして溜息をついていた。

## 登場、悪の大幹部！ 【11】

「ねえ、ヴィーナス、わたしじゃ、ダメなのかな？」

ハートのペンダントを見詰めながら、愛美はヴィーナスに語りかけた。

「わたし、水魚ちゃんの気持ちを全然考えずになんてひどい事を…」

顔を押しさえるように手で覆った愛美が、左右に首を振った。

「やっぱり、わたしじゃ、リーダーなんて務まらないのかしら？」

「愛美センパイ？」

愛美が振り向くと、そこにはじょうろを手に、おずおずと上目使いにこちらを見詰めながら、花園妖子がちょこんと立っていた。そう言えば、この花畑は確か妖子が世話していた筈だった。

「妖子ちゃん——」

「センパイ、誰とお話してたの？」

携帯電話の普及で最近では独り言も余り奇異な目で見られなくなつたが、妖子は何となく気になるらしい。

「センパイも、妖子とおんなじなの？」

「おんなじ？」

「お花さんや、風さんの声が聞こえるの？」

「あ、あは——」

愛美はちよつとつろたえて答えた。

「そうじゃなくてね、妖子ちゃん」

愛美は掌にペンダントを乗せて、妖子に掲げて見せた。

「大切な——お友達と話してたの」

「お友達？」

妖子がペンダントを覗き込むように見詰めた。暫くして——

「——お友達？」

妖子が、ペンダントを指差した。

「ええ——」

愛美が頷いた。

「とつても大切な、お友達の——」

愛美が言葉を切つて、一息つけてから続けた。

「——形見なの」

「形見……」

妖子が小首を傾げた。

「お友達つて、おつきなビーナスの事？」

「ええ」

愛美が、やや寂しげに頷いた。

「センパイ」

「なあに？」

「妖子も、おつきなビーナスとお話してもいい？」

「妖子ちゃん……」

妖子の一言に、愛美が感に耐えないと言つように呟いた。

「ダメ？」

「そんな、妖子ちゃん——」

潤んだ瞳を輝かせて愛美が溜息をつくように言った。

「有り難う、妖子ちゃん。是非、お話してあげて。きっとヴィーナ

スも喜ぶと思うから」

「うん——」

素直な、どこまでも純真な笑顔で頷いた妖子に、愛美の胸が熱くなつた。

## 登場、悪の大幹部！ 【12】

「ねえ、連中、こんな所でナニやってんのかしら？」

いつもの奇妙奇天烈な黒装束の上からコートを羽織り、ソフトを目深に被ってサングラスを掛けたデスハードの戦闘員たちを物陰から見張りながら、天野翔子が呟いた。

「判んない——」

困った顔でポツリと答える花園妖子の頭を、荒井勇気が慰めるようにそつと撫でた。

「妖子……あのおうち、怖い……」

妖子だけではなく、五人全員緊張していた。仕方有るまい、何せ戦闘員達が怪しげにして間抜けな扮装で周りをうろついている、それ程豪華ではないが見るからに敵しい、古風な造りの屋敷の門構えに掲げられた何かの道場のような巨大な表札には、筆勢鮮やかな草書体で『大門寺一家』の文字が墨痕黒々と認められてあったのだから、流石に気丈で恐いもの知らずの乙女達も、正直及び腰と言うのが本音なのだ。

デスハードくらいなら恐くも無いが、相手がコワイお兄さんとなると如何に愛と正義の美麗戦隊と言えども遠慮したくなるのが人情と言うものであった。

またまた真崎博士から、今回は幸い昼休みの最中にスクランブルが掛かり、駆けつけてみればこの通り、一体こんな所で何をやっているのか、彼等の目的が何なのか、いつもの事とは言えサツパリ見当がつかない。

「ホントにナニ企んでるのかしら」

天野翔子が忌々しげに呟いた。

曲がり角の陰から、勇氣、愛美、翔子、水魚、妖子の順に顔を並べた面々は、相手の真意を掴み兼ねて揃って眉を顰めていた。

「ねえ、どうしよう?」

海原水魚の一言に、全員が改めて首を捻った。

「そうねえ、このまま待ってても埒が開かないかも知れないわねえ」  
一見もつともらしい愛美のこの一言は、本音を言えば学校の制服に  
素顔を曝したまま、いつまでもこんな所に居たくないと言う想いの  
表れであった。その、全員の気分を汲んだリーダーの的確な提案に、  
一同は救われたように揃って頷いた。

「それじゃ……」

愛美がブレスレッドを掲げると、残りの四人も慣れた呼吸でその後  
を追った。

「赤色麗装美神変!」

リーダーに続いて各自の装変コードを口にすると、眩い光に包まれ  
た五人の少女が、色鮮やかな正義のコスチュームに身を包んでポ  
ズを決めた。

## 仁義無き戦い？ 【1】

「しかし、驚きましたな」

下つ端の一人が、妖しげなデザインの腰掛に身を沈め、爪の手入れに余念の無いムチムチプリンセスに機嫌を取るような手付きで申し上げた。

「何が？」

「いや、なんと申しましょうか——」

辞を低くして、下つ端がプリンセスに言った。

「そこまで深いお考えの元に作戦を御建てになるとは、わたくしどもなどには、想像も——」

部下の心からの賞賛に、オホホホホ、と甲高い笑い声を立てたプリンセスだった。

「我々とは目の付け所が違いますな」

「まあ、これもアタマの違いかしら」

「いや、全く——」

益々ヨイシヨに熱の籠った部下が、更にプリンセスを持ち上げた。

「いやあ、これまで自分たちは、兎も角組織に忠誠を尽くそうとそれだけしか考えてこなかったもので——」

「ふーん——」

ねつとりとした、底意地の悪い流し目で部下を窺うプリンセスだった。

「兎も角、忠誠さえ尽くしてれば給料だけは貰えると——」

「いやあ、それを言われると……」

実際その通りなので返す言葉も無い。

「この、日本支部に赴任して来るに当たって、前以ってあんだ達の報告書を読ませてもらったわよ」

「へえ——」

下つ端は驚いた。まさかそんな物にわざわざ目を通すとは思っても

見なかったもので、正直な話、新鮮ですらある。

「あんだ達のやってきた作戦——」  
腰掛の手すりに頬杖ついて、プリンセスが何ともいえない顔を見せた。

「一体、何考えて計画建ててんの？」

「そ、それは……」

下っ端は答えに窮した。

「当ててあげましょうか？」

如何にも自信に満ちた、相手をいたぶる笑顔である。

「要するに、何か適当に目立つ事やって、自分たちは仕事してます、て、本部に報告さえ出来ればそれで良いと——」

「いやあ——」

まさしくその通りである。痛い所をズバリと衝かれて、下っ端は益々答えに詰まった。

「ま、しょうがないわ」

言葉通り、しょうがないと言う風に両手を広げたプリンセスが、割と淡泊に言った。

「それがニツポンの伝統なんですもの。コクテツ、オヤクシヨ、退屈を我慢する事が仕事だって言うのも、日本の古き良き習慣だって聞いているし」

古きは兎も角、ちっとも良くは無い。

「だけど——」

ぐ、と身を乗り出すように部下を睨みつけたプリンセスが、声を潜めた。

「これからは違うわよ」

プリンセスの目に宿った強い輝きに、下っ端は身を竦ませて震え上がった。

「今までみたいな身内の馴れ合い凭れ合い、なあなあで物事済ます日本型相互補助の責任転嫁は許さないんだからね」

「は、はは——」

下っ端が恐れ入って頭を下げた。

「いい事、組織の首領、偉大なる宇宙神と直接コンタクトを取って神託を受け賜る我等が女王、ビンビンクイーン直属の大幹部、このムチムチプリンセスが直々に指揮を取る以上、この日本支部は世界制服の最前線基地として常にトップの成績を目指すのよ！」

「ははあ——」

更に恐れ入った下っ端が、またも頭を下げた。

「まあ、一度方針を立てたら後は部下を信じて全てを任せるのが上に立つものの役目だし、今は兎に角、朗報を待ちましょ」

「はは——」

「それじゃあ、あんた、肩でも揉んでもらえるかしら？」

「はい、喜んで——」

急いで後ろに回った部下が、恭しい手付きでプリンセスの肩に手を触れた。

「いい事、このわたし、類稀なる美貌を誇るこのムチムチプリンセスの、美しい体に手を触れる、人類最高の栄誉と幸運を噛締めて、心を込めて揉むのよ、判ったわね？」

「それはもう」

部下が、それは熱心にプリンセスの肩を揉んだ。

「凝ってますねえ、実際」

「そうなのよねえ、この豊かなバストを支えるのって、並大抵じゃないのよねえ。美しい肉体の代償かしら。この美しさを支えるのは大変なのよ。美しさって罪よねえ」

下っ端の真心の籠ったマツサージに、すっかり心身をリフレッシュさせたプリンセスが、ネコのように喉を鳴らした。

「それですね、プリンセス——」

「何？」

「プリンセスの計画は素晴らしいのですが、これを実行となると厄介な連中が……」

「判ってるわよ」

プリンセスが余裕の微笑みを洩らした。

「美麗戦隊とか何とか言うイカれた格好の奴等の事でしょ？」  
自分の事を棚上げして、良くぞ言えたものである。

「ま、何とかなるんじゃない？ コスプレかチンドン屋か、何の酔狂か知らないけど、あんなこつ恥ずかしいカツコで街中うるつくよ  
うなアホに、何が出来る訳でもないし……」

人の振り見て我が振りを全く省みず、他人を遠慮無く扱き下ろす快感はやめられないのが人情と言うものである。一体誰が彼女を責められようか？

「あー、そこそこ、いーわねー、効くウ——」  
「報告します——」

マツサージに身を委ねて、夢見心地のプリンセスに、別の部下が罷り出た。

「見付かりました、お言葉に添った、お誂え向きの極道が」  
「ホント？」

目を輝かせ、やおら立ち上がったプリンセスが嬉しそうに叫んだ。

「いよいよだわ——！」

プリンセスの、豊満な胸が、物理的にも抽象的にも揺れ動いた。

「いよいよ、あの名高き『ザ・ヤクザ』と対面できるのね——」  
プリンセスの脳裏には様々な光景が去来していた。

着流し、長脇差、桜吹雪に般若のお面、色取り取りの刺青が、背中で泣いてる漢の美学。

「勇壮でカラフルな昇り竜の刺青が逞しいモロ肌脱ぎに吠えて、嗚呼——そうよ、これよ、これなのよ——」

鮮やかな倶梨伽羅モンモンを想像してモンモンと妄想に耽るプリンセスの頬は桃色に上気し、今にもイってしまいそうなほどに盛り上がっていた。

「いやーん、もうダメ。あたし、疼いちゃう」

その豊かな美化脂肪を波打たせて、喘ぐように悶えるプリンセスを見守る下っ端たちの目は、何とも言えず虚脱感が漂っていた。

流石に、その視線に決まりが悪くなったプリンセスが、コホンと一つ咳払いを洩らすと再び威厳(?)を取り戻し、矢張り腰に手を当て、鞭を高々と掲げて景気良く号令をかけた。

「よし、それじゃ、行くわよ。『仁義なき戦い』作戦』の実行段階発動！」

「イー！」

ムチムチプリンセスの命令に、下っ端の戦闘員達が威勢の良い奇声を上げた。

## 仁義無き戦い？ 【2】

ここ、都内某所に事務所を構えるのは昔気質かたぎの古風な任侠道で斯界に名の知れた、広域指定大門寺一家であつた。

「親分おやつさん、お加減は如何で？」

「あ——」

「親分おやつさん——」

嘗ては一代の侠客として名を轟かせた大親分、桐蔭匡為の変わり果てた姿に若頭の夏目大吉は涙を流した。

大門寺一家は、戦後の経済発展と供に急速に近代化、企業化したこの世界に在つて、今時珍しい昔気質の義理と人情を重んずる伝統派のヤクザとして、業界では一目置かれる特異な存在なのである。

戦後、押し寄せる経済発展の波に好むと好まざるとに關らずヤクザと言えど急激な体制の変化を余儀なくされ、任侠道は地に落ち見る影も無く鳴りを潜め、暴力を商品に堅気の人間を苦しめる事をもつて生業とする、所謂“暴力団”へと墮落したのであつた。嘗て、ヤクザの本場は關東、俗に言う關八州の侠客などが知られる存在であつたが、経済活動に軸足を移した戦後には、本場は關西に移行した。譬え、世間に対する只のタテマエとは言え、一応曲がりなりにも任侠とか義理人情が看板であつた頃には關東が本場だつたのに対し、關西に移つてからはそう言つた慎ましやかな体裁ですらかなぐり捨ててヤクザと言えば金、ブランド品、外車、政治家との癒着と言つたさもしい図式が完全に定着してしまい、他人に対し本性を隠すと言つた遠慮すらも失われたのである。

昔気質のヤクザは嘆きながら言つた。金がヤクザを殺した、と。ヤクザの世界では金儲けの事を“シノギを立てる”と言つのだが、その語源は博徒と言ふ本来生産性の無い渡世を全うする為に、止む無く一時的に金儲けに手を出す事に由来し、その場を凌ぐ、一時シノギに過ぎない筈だつたのである。所が、昨今のヤクザはシノギを立

てることを持つて本業としたかのように、一にも二にも、金金金と目の色を変える有様であった。今では大半が廃刊してしまつたアニメ雑誌が雨後の竹の子のように刊行された昭和五十年代には、経済極道などと言う堅実なのかどうなのか良く判らない言葉が顕在化し、任侠雑誌なる得体の知れない出版物が景気良く出回つていたそうである。

そんな中に在つて、未だ昔ながらの任侠の道を貫く大門寺一家は押し寄せる時代の波に抗つて、同業者の間からは複雑な評価を受けつつも今日に至つていた。しかし、時代に逆らつて己を貫くと言うのは並み大抵の事では無く、彼等は長く苦しい冬の時代を生き抜いてきた。そして漸くそれが報われ始め、ここ数年、彼等大門寺一家は、業界内部におけるその存在が徐々にクローズアップされ始めたのである。

数年前に施行された暴対法に加え、出口の見えない平成大不況の真つ只中、一時羽振りを利かしていた経済極道たちも青息吐息で喘ぎ始め、嘗ては時代の波に乗り、ノリにノリまくつていた連中が逆に前時代の遺物として淘汰され始めたのであつた。嘗ては時代の寵児として持て囃された経済極道も、今となつては金に血道を上げ続けた異常な時代に咲き誇つた只のアダバナ、恰も中生代の環境に過適応して巨大化し、巨体を持て余して時代の移り変わりに取り残されて滅亡した恐竜を思わせるお粗末であつた。

そんな、金に身も心も売り払つた浅ましき亡者どもから見れば、時代の流れに屈する事無く任侠道を貫いた昔気質の大門寺一家が、ヤクザの本来の姿であると漸く気付いたかのようであつた。それを支えていたのは、何と言つても桐蔭親分の貫禄と人徳に他ならない。暴力団対策法が施行されるに当たつて、この大門寺一家を広域暴力団として指定するかどうか、警視庁で検討したくらいであつた。無論、好意からだつたがこれを聞いた桐蔭親分は色を為して怒り出し、メンツが立たねえ、桜田門に殴り込みだ、と叫んだほどである。とは言え、大門寺一家は世に言う“武闘派”と言う訳ではなかつた。

任侠道とは、忍耐の道である。ヤクザとは本来戦闘のエキスパートではない。第一この武闘派等という戦後俄かに流行り出した、取って付けたような言葉自体がその事を如実に物語っているではないか。元々集団行動が基本の狼の場合“一匹狼”と言う言葉が有るのに対し、単独生活が原則の虎には“一匹虎”などと言う言葉が無いように。ヤクザが力に訴える時、それは最早、暴力である。故に“暴力団”なのである。洋の東西を問わず、本来のヤクザの姿は辛抱なのである。幕末から明治にかけて大阪に一家を構えた、鍵屋万吉という大親分は、若い頃“辛抱万吉”と呼ばれ、大阪西町奉行所のあらゆる拷問に耐えて大いに売り出したのだ。第二次大戦前後、アメリカにマフィアを中心とした巨大な犯罪シンジケートを築き上げた功労者で“ラッキー・ルチアーノ”と呼ばれるドンも、成程、腕や頭脳なども秀でてはいたものの、彼がその世界に名を轟かせる切欠となった事件は若い頃、マフィア同士の抗争で敵方のドンに捕まって拷問を受けたにも拘わらず、五体満足で生還してきたという不死身の忍耐強さであった。その強運を称して“ラッキー”の尊名を頂戴したのである。『血のヴァレンタインデー』などと言う抗争絡みの殺傷事件で世の中に名の知れたアル・カポネなどは、仲間内ではキレ易く頭の悪い粗暴犯として軽蔑されていた。つまり、矢張りヤクザにとって最も重要な、評価の基準は“辛抱”と言う事であった。それでも、ここまでの道のりは生易しいものではなかった。バブル全盛の頃には、上辺こそ伝統派の古風な侠客たちに一応の敬意を表していた同業者達だが、その一方で金儲けにせつせと勤しみ、時代遅れな任侠の徒たちを内心嘲笑って我が世の春を謳歌していたのであった。時代の渦中にどっぷりと浸った、勝ち組と呼ばれる成功者にはその先の事など見えず、見る事を意識的に避け、ヤクザと言えば最低外車が一人一台と言う状態が永遠に続くと思っていたのである。昔ながらの任侠道が復活するなどと言うのは、さながらムーの白鯨が海上から天空に浮上するような白昼夢であり、そのような妄想に浸るムー原人などは時代錯誤を通り越して一時代前の段階の

生物、日光江戸村を通り越して日光猿軍団のような連中と嘲笑っていたのであった。

時代は確実に移り変わりつつある。

しかし、皮肉な物であった。

「親分っさん」

「おお、新の字か？」

「親分っさん……」

若頭の夏目大吉が悲しげに呟いた。

「新蔵の奴あ、三年前工に死んじまいやした」

「才才、済まねえ、徳次郎だったか？」

更に昔に稼業の行き掛かりで命を落した、駆け出しの頃に散々世話になった兄貴分の名前に、大吉は言葉にし難い悲しみを抱いた。

「親分っさん、何て工情け無工お姿に——」

大吉は涙を流した。

この大門寺一家の三代目大親分こと桐蔭匡為、嘗ては一代の侠客として名を為したこの親分も、若い頃の無理がたたったのかここ数年特に老人性痴呆症の症状が悪化し始め、その日常の拳動は典型的なアルツハイマー型の兆候が深刻化していた。

「……大吉でやす、親分っさん」

「おお、大吉か。苦勞を掛けるなあ。お前さんは良くやってくれとる。まだ若工んで頭という訳には行かねえが、歳が長けたらきつとお前工を若頭に据えてやるからな」

「恐れ入りやす、親分っさん」

夏目大吉は、もうとづくに若頭筆頭の地位にある。当然、大親分直々の指名に他ならない。逆行性健忘症の症状が顕著であった。

「氣を使わねえでおくんなせえ、あっしは修行に精出して頑張りやすんで」

大吉は親分に逆らわなかった。

“世の中ってのは、何でこんなに理不尽に出来てやがんだ——”

夏目大吉は運命の皮肉にやりきれない思いだった。

“折角、こうして大門寺一家の名前が再び斯界に知れ渡り、親分さんの貫いた任侠の道が日の目を見ようってエ、この時に――”

この桐蔭匡為親分は、ある意味では歴代の親分の中で最も苦しい時期に跡目を継いだと言えるだろう。時恰も、戦後は終わったと言われた昭和元禄真つ只中の右肩上がりの時代、二代目親分の指名を受けて大門寺一家の跡目を継いだ匡為親分は皆が挙って金儲けに直走る世相に逆らって、極道の本分を貫いた苦勞人であった。同盟国側の犯罪組織が国家権力の統制の前に壊滅的打撃を受けた戦前戦中も苦しかったろうが、ヤクザの在り方そのものが根本的に問い直された戦後のバブル時代も、その波に乗った者はいざ知らず、それと拮抗して対立していた立場にとっては筆舌に尽くし難い苦難の時代であった筈だ。しかし、漸くその苦勞が報われ、一旦彼等の頭の上を通り越したかに見えた時代が再びUターンを始めた頃には親分もめつきり老け込み、嘗ては最後の侠客と謳われた硬骨漢も、今ではすっかり恍惚の人と成り果てたのである。

知り合いの親分の中には、好意で係り付けの腕の良い医者を世話しようとか、いい漢方薬が手に入ったとか声を掛けてくれる者もあった。功成り名を為した親分は、殆どの場合健康管理に気を使う。その手の知識や心掛けは素人離れた者も多かった。周りみんなが金儲けに血道を上げていたとは言え、桐蔭親分と同期の親分衆もそんな浅ましい自分を内心恥じていたようで、昔気質の硬骨漢に正直敬意を抱いていたのである。単に道徳的な意味ばかりではなく、こう言った真ツ正直な侠客ならば利害の対立も少ないから、金銭に絡んだトラブルが発生した時には周りの親分たちも、良く桐蔭親分に手打ちの仲裁を頼んだから頭が上がりないのだ。

そんな時、桐蔭親分は、

「あいつ等も、本当は任侠を心得た連中なんだ。只、身内を抱えてどうしても食わせて行く為、身を落さなきゃあ、ならんで」

等と彼等を弁護した。

「それに比べてわしは、お前工等子分たちに苦勞ばかり掛けてよう、

不甲斐無い親父を許してくれや」

そんな桐蔭親分の心意気に、黙って着いて行く者も、多くは無かつたものの皆無でもなかった。その筆頭が夏目大吉であった。

“親分っさん——”

その頃——

仁義無き戦い？ 【3】

「イー?!」

「イー、イー!」

「行つくわよお、それえ。ヴィーナス・ビューティフル・レボリュ  
ーション!」

ヴィーナスレッドの全身から眩い、赤い光が流星のように照射され、  
デスハードの戦闘員たちを薙ぎ倒した。

週一で放送しようと思ったら、こう言っただ必殺技は変身シーンと供  
に必要不可欠なお約束、大切な経費節約場面である。鋼鉄女神が居  
た頃なら、これに加えて出動シーンも有ったのだが。

「アマゾネス・アロー・インパクト!」

「いいわね、エンジェル・エレガント・レインボウ!」

「喰らえ、マーメイド・サイクロン・ウェーブ!」

「えーい、フェアリー・フラワー・ストリームなのー!」

それぞれ、各自銘々テキストでアリキタリな、いやいや、華麗なる  
ネーミングの必殺技を披露して、その美しさと艶やかさを競う美麗  
戦隊の少女たちであった。

「イー!」

戦闘員たちは粗方片付けた。

「もういいんじゃないや御座いません事。帰りましょう!」

「そうね」

エンジェルホワイトの提案に、ヴィーナスレッドが同意した。

「こいつらさえ居なくなっちゃえば問題は片付いた訳だし、後はわ  
たしたちが居なくなっただって……!」

目の前には堅気の間人とは縁の無さそうな厳いかめしい門構え、正直言っ  
て、早い所引き上げたいと言うのが本音である。しかし――

「ちょおつと、待ったア！」

「何？」

「……！？」

甲高い叫びに振り向いたティンカーVの五人は声を失った。

無理も無い、そこには傍若無人の四文字を絵に描いたような服装の、これみよがしにグラマーな若い女性、ティンカーVのメンバーと余り代わらぬ年代の娘が、新たに引き連れてきた戦闘員を従えて立っていたのだから。

「帰ってもらっちゃあ、困るのよね、実際——」

両手で鞭をしごきながら、レーザー地の食い込みまくりのボンテージファッションに、怪しげな仮面で顔を隠したその姿は、健全な未成年が立ち入り禁止の地下秘密クラブの女王様といった趣だった。

「あ、あなたは……？」

その姿に、正直腰の引けたヴィーナスレッドが妙に静かな声音で訊ねた。

「ふ——」

ヴィーナスレッドの物腰に満足したのか、女が関節の動きが不自然に緩慢な仕草で肩をそびやかし、思わせ振りの横顔を見せて微笑んだ。

「わたしは凶悪帝国デスハード、本部直属の大幹部。今度日本支部の責任者として配属された、その名も高き——」

大袈裟なアクションでマントを翻し、鞭を一振り躍らせた。

「ムチムチプリンセスよ。アンタ達、よく憶えておきなさい！」

その名乗りに、美麗戦隊五人は再び声を失って後ろに身を引いた。

その姿に、プリンセスはまたまた大満足の体であった。

しかし——

「ん——？」

プリンセスは怪訝な顔でティンカーVの方を見返した。良く見てみれば、相手の様子がおかしいではないか。

「——く——」

皆一様に肩を震わせているのだが、それは恐怖の余り震えている訳ではないようである。

「うふ、くくくくく——」

ティンカーV達は口を押さえ、下を向き、何かを我慢していると言っている感じである。

「な、何よ、あんたたち——」

相手が何に耐えているのか、大体プリンセスにも察しが着く。正直な所彼女自身にも自覚は有るのだから。

「失礼ね。折角、人が名を名乗ってあげてなのに、ナニよ、その態度は——」

「ゴ、ゴメンなさい、でもお——」

手で口を抑えたヴィーナスレッドが律儀に謝ったが、五人の笑いは収まりそうに無かった。アマゾネスブラックが下を向いて、エンジンホワイトは顔を両手で覆い、地面にへたり込むようにマーメイドブルーが笑っていた。フェアリーピンクに至っては、転がり回って笑っているのである。

「ナ、ナニよ、何なのよ、一体——」

そのプライドを深く傷付けられたデスハードの誇り高き大幹部は、肩を怒らせて訴えるように叫んだ。

「何よ、アンタ達。人の名前になんか文句でも有るの？」

「いいえ、そんな——」

咳き込むように、ヴィーナスレッドが答えた。

「あなたにピッタリの、ステキなお名前よ」

名前だけならば相手もここまで笑い出す事は無かつたらうと思われ。只、本人を前にすると、余りにハマり過ぎたその名前が、最高にツボに入っただけだったのはどうにもいた仕方無い。

「そ、それでね、ムチムチプリンさん」

「ムチムチプリンじゃない、ムチムチプリンセスよ！」

「ゴメンなさい、あはははは——」

仁義なき戦い？ 【4】（前書き）

皆様、お久しぶりでございます。あるいは、はじめまして。  
まだ、暫らくはなかなか更新できない状態ですが、のんびりと見て  
やったださい。

## 仁義なき戦い？ 【4】

「おのれ、貴様等……」

どうしても笑いの止まらない、憎き美麗戦隊に蒼褪めた顔を引き攣らせ、誇り高き大幹部は部下達に命じた。

「アンタ達、ナニやってるの！合成獣を連れて来なさい」

「イー！」

命令された戦闘員が、何やら上から布で覆いかぶせた物体を乗せた台車を押しながら、いそいそと登場した。

「おのれ、美麗戦隊とやら、よくも人の事を散々コケにしてくれたわね。地獄で己の罪の深さを思い知るがいい！」

怒りにその目をギラギラ輝かせ、プリンセスが叫んだ。

「出でよ、我が下僕しもべ！」

言うが早いか、プリンセスは台車の布を引き剥ぐり、中から奇妙な合成獣が出現した。この合成獣と言うのは常に奇妙な姿なのだが、今回ののは奇妙なのが形状ばかりではなく、その姿勢も今までに無く奇妙であった。カエルの顔に、両手両足には矢張りその面相に相應しい水掻き、全身はカンガルーのような合成獣が自らの尻尾で体を支え、ロダンの彫刻のようなポーズで座り込んでいるのである。

「行けえ、合成獣カンガエル。あんたのジャンプ力であいつ等を蹴散らしておやり！」

ピシッ、と景気良く、猛獣使いのようにプリンセスが鞭を一打ちすると、カンガエルと呼ばれた合成獣が伏せていた顔をむっくりと起こした。

「承知致しました、ゲコー！」

両手を前に着き、軽々と跳び上がったカンガエルがティンカーV達の頭上を跳び越し、易々と背後を取った。

「な、何？」

慌てて後ろを振り返ると、今度は反対側に跳び移った。

「イヤーン、何ですの、これ？」

エンジェルホワイトが身を擦じらせるように声を上げた。

「ゲコゲコゲー！」

奇声を上げながら、カンガエルーがティンカーVの周りを飛び跳ねて、たった一人で包囲するように円を描きながら動いている。

「こ、こいつ——」

マーメイドブルーがうめくように声を洩らした。

「もー、どうすればいいの！」

ヴィーナスレッドが泣きそうな声を上げた。フェアリーピンクは既に泣き顔でアマゾネスブラックにしがみ付いている。

「オーホホホホホ！」

ムチムチプリンススがしてやったりと言うように高笑いを披露した。

「いーわよ、カンガエルー。そのまま一気にやっちゃいなさい！」

「ゲコ！」

周囲を跳び回っていただけのカンガエルーが、円周の中に跳び込んだ。

「キヤー！」

間一髪身をかわしたヴィーナスレッドが、憐れな悲鳴を上げた。

「アハハハハ、いい気味ね、ティンカーV」

憎さも憎しティンカーVの無様な姿に、プリンススは最高にご満悦の様子であった。

「もー、どうすればいいの？」

「落ち着いて、レッド！」

またしても先程と一言一句違わぬ悲鳴を上げたヴィーナスレッドに、アマゾネスブラックが諷めるように言った。

「要は相手の動きを止めれば良いのよ」

「足止めすればよろしいのね？」

エンジェルホワイトが新体操のリボンに似たエンジェルリボンを構えた。しかし、狙いが定まらない。

「あーん、速すぎますわ！」

「それじゃ、ボクが！」

カンガエルの動きを捉えきれずに困惑するエンジェルホワイトに、  
マーメイドブルーが応えた。

「うおりゃー、マーメイド・サイクロン・ウエーブ！」

「ゲ、ゲコー!?」

マーメイドブルーの作り出した青い竜巻に、カンガエルーが巻き込まれた。

「今ですわ！」

エンジェルホワイトが鍛え上げた新体操の妙技を披露して、七色の  
リボンを巻き上げた。

「エンジェル・スパイラル・レインボウ！」

「アマゾネス・アロー・インパクト！」

リボンに巻き取られて動きの止まったカンガエルーに、アマゾネス  
ブラックが見事に一矢を報いた。

「ゲ、ゲ、ゲコ、ゲコー」

痺れたまま地面に落ちたカンガエルーが痙攣しながらうめいていた。

「何やってんのよ、カンガエルー。しっかりしなさい！」

「ゲコ、ゲ、ゲコゲコ——」

プリンセスの叱咤に、頷くように首を動かしたカンガエルーが声を  
洩らした。

「今よ、みんな！」

「おおー！」

ヴィーナスレッドの号令に、四人が頷いた。

五人が右手を差し出して、一点に集中した。

「な、何、一体?!」

プリンセスの見守る前で、ティンカーVが次々に叫んだ。

「ヴィーナス・ビューティ・エレメント！」

「アマゾネス・セクシー・エレメント！」

「エンジェル・プリティ・エレメント！」

「マーメイド・キューティ・エレメント！」

「フェアリー・ラブリー・エレメントお！」

五人の手の集まった中心点に、眩い輝きが宿っている。プリンセスがうるたえて声を上げた。

「ナニよ、これー?!」

「ティンカー・クリスタル・ペンタグラム！」

ティンカーVの五人が声を揃えて叫ぶと、透明に輝く五傍星が出現した。

「ゲ、ゲ、ゲゲゲのゲー！」

ペンタグラムに包まれたカンガエルーが断末魔の叫びを上げた。

「カンガエルー！」

プリンセスが悲鳴を上げると、そこに合成獣の姿はなく、カエルとカンガルーが別々に佇んでいた。カエルもカンガルーもその場から逃げ行ってしまった。カエルの方は兎も角、カンガルーがあのみまでは後々、町中は大騒ぎであろう。

## 仁義なき戦い？ 【5】

「おのれえ、ティンカー？め……」

鞭を両手で握り締めたプリンセスが、忌々しげに吐き捨てた。

「まあ、いいわ、今日の所は挨拶代わりって事で、この位で勘弁してあげるから——」

悔し紛れのジョークのつもりか、プリンセスが受けない冗談を口にした。ティンカー？の面々が呆れたような顔でプリンセスを眺めていた。

「しかし、何ていうか……」

しげしげと、物見高い視線をティンカー？に向けたプリンセスがニヤリと底意地の悪い笑顔を見せた。

「ティンカー？って、確か女ばかりの五人組じゃあなかったっけ？」

「それがどうしたのよ?!」

「だけど、実際に見てみると、男の子が一人混じってるじゃない？その前振りだけで、相手が何を言いたいのか、マーメイドブルーは敏感に察知した。流石にその事で一揉め有った直後だけにヴィーナスレッドも素早く、過敏なほどに反応した。

「何ですってえ？」

「普通、戦隊って言うのは男の中に紅一点、女性メンバーが入ってるものだけど、美麗戦隊ってその逆なのね」

「何ですってえ——？」

為す術も無くといった風情で押し黙るマーメイドブルーを見下ろすような、プリンセスの悪意に満ち満ちた笑いに益々逆上したヴィー

ナスレッドが追い討ちをかけるように言い返した。

「言ってみなさい、一体わたし達の中のどこに男の子が居るって言うの?」

ヴィーナスレッドは責任感の強い、仲間想いの熱血リーダーである。仲間が侮辱されようと言うのを黙って見過ごす事など出来はしなかった。しかし、それでは益々相手の術中に嵌る事に成るばかりなのである。傍で成り行きを見守っていたエンジェルホワイトが、オロオロしながらムチムチプリンセスとヴィーナスレッド、そして宣告を待つように俯いて押し黙ったままのマーメイドブルーを見詰めていた。そして――

「決まってるじゃない、その青……」

「ちょっと待ちな――」

「――な――?」

折角、上機嫌で相手をいたぶろうと言う所に、思わぬタイミングで中断が入り、プリンセスは戸惑った。

「あんだ、そいつア、どう言う事ったい?」  
アマゾネスブラックだった。

「ナ、ナニよ、あんたは――」

「聞き捨てなら無いね、その一言は」  
決して大声ではないが、足元のしっかりした、堅固な語調である。

「幾らあたしがデカイ女だからって、男呼ばわりとは許せないね」

「ア、アンタじゃないわよ。その……」

「御黙り。そんな恥かしい格好にみっともない名前で人様の前にし

やしやり出て、臆面も無く贅肉見せびらかすようなノータリンに、  
そこまで言われる筋合は無いよ！」

「な……贅肉？ノータリン？」

アマゾネスブラックの無礼極まる一言に、プリンセスは思わず言葉を失った。

「アンタ、それはどう言う……」

「ほらほら、そこに」

鞭を手に、相手を指し示すポーズを取ったプリンセスに、アマゾネスブラックが余裕で言い返した。

「その脇腹、皺が寄ってるのは贅肉じゃあないのかい？」

「な、何ですって?!」

慌てて脇を隠そうとしたその不細工な姿がよほど可笑しかったのか、ティンカー?の五人が反射的に笑い出した。

「……な……」

思わぬ醜態を曝した誇り高きプリンセスは、真っ赤になってティンカー?を睨み付けたが、優越感に満ちた相手の視線に、押し潰されるように再び言葉を失った。それに加えて、実はプリンセスの背後では、手下の戦闘員達も声を殺して笑っていたのである。

「——く——」

屈辱に涙を浮べたプリンセスが、齒軋りしながら身を震わせた。

「憶えてなさい、美麗戦隊ティンカー?!」

戦闘でも口でも完敗に終わったムチムチプリンセスは、マントを翻して言い放った。無意識の行動かも知れないが、矢張り“贅肉”を隠したかったのかも知れない。

「この位で勝ったと思わないことね。この次は必ず思い知らせてあげるわよ！」

プリンセスが後ろを振り返ったと同時に笑いを噛み殺していた戦闘員が弾かれたように気を付けの姿勢で威儀を正した。

「引き上げよ！」

「イー！」

最初の目的が何だったのかさえ忘れるほど頭に血が上ったプリンセスが、さっさとその場所を引き払った。

仁義なき戦い？ 【6】

「あー、終わったわね」

ホッと一息つくようなエンジェルホワイトの一言に一同が、ホッと安心ひと心地——とは行かないのが世の中なのである。

「何でエ、一体。鉄砲玉か？」

大門寺一家の表門から、いかにも年季を積んだ玄人筋のおニイさんがワラワラと顔を覗かせ、こちらの方を窺っているのである。

流石の美麗戦隊も背筋が凍り付くほどに竦み上がった。

「お控えなすつて、お控えなすつて——」

若い衆の中では比較的年嵩の、一際貫禄を漂わせた壮漢が、仁義を切りながら底に響くような声でティンカー？に話し掛けた。

「早速のお控え、恐縮にござんす。手前、此方の大門寺一家で若頭を務めて居りやす、夏目大吉つてえ半端モンにござんす。卒辞ながらお伺い申し上げやす。一体エ、本日はどういった御用向きで手前どもの門前にお越し頂いたのかは存じ上げやせんが、手前どももこうしてこの世界で飯を食つて居りやすは、些か体面てえモンが御座エやす。そちらさんが何れの御身内かは存じやせんが、事と次第によつちやあ、キツチリ落とし前を着けて頂かねえ限りは渡世の義理が立ちやせん。こちらとしても、スジつてえモンを通させて——」  
その凄みの効いた口上に、愛と正義の美麗戦隊も震え上がった。

「ゴ、ゴメンなさい、ゴメンなさい、ゴメンなさい——」  
五人揃つて何度も何度も頭を下げた。

「あ、あのですねえ……」

道端に倒れている戦闘員を引き摺り起こして、ヴィーナスレッドが説明した。おつかないが、これもリーダーの役目である。

「わ、悪いのはゼーンぶこの人達です。この人達、何だか、そつちの御邸をゾロゾロ見張ってたモンですから――」

「するつてえと、お嬢さん方は巻き添えを食ったつて工訳で？」

「そうです、そうなんです！」

汗を掻きながら必死で陳弁するリーダーの頼もしきその姿に、美麗戦隊のメンバー全員が等しく言い知れぬ尊敬の念を抱いていた。

「そうでござんすね。こんなお嬢さん方があつし等みてえなはみ出しモンに用が有る訳やあ御座いやせんし」

「いいえ、滅相も無い」

礼儀正しい相手の謙譲に、思わずハイと応えそうになったヴィーナスレッドが慌てて首を振った。

「判りやした。知らぬ事とは言え、見ず知らずの素人さんにご迷惑をお掛けした事、この通り詫びの言葉も御座いやせんが、どうかこの不始末の落とし前はあつしの指でご勘弁を……」

もう既に両手の小指はとつくに失っている大吉が、更に別の指を見ながら言った。

「い、いいんです、そんな、そこまで気を使つて頂かなくても――」

余りに余りな男稼業の壮絶な言葉に真っ青になったヴィーナスレッドが取り成すように必死で言い繕った。彼女だけではなく、ティンカー？のメンバー全員が血の気を失い、中でもフェアリーピンクはとつくに目を廻し、気を失ってアマゾネスブラックに支えられていた。

「そ、それじゃあ、わたし達はこの辺で失礼しますので」

「そうでやすか、それじゃあ、お嬢さん方も道中お気を付けて」  
「失礼しまーす、お元気で——」

風のように去って行ったテインカー？を見送ると、若頭の夏目大吉がそこ等中に転がっている気の毒なデスハードの戦闘員たちを見下ろしながら言った。

「お前えら、お客人をお通ししろ。くれぐれも粗相の無えように、丁重にな。どこのお身内衆か、今日は一体工何のご用件でうちの玄関先に出向いて来られたのか、中でとつくりと御伺いするんだ」  
「へい、畏まりやした」

仁義なき戦い？ 【7】

「あー、びっくりした——」  
夕焼け小焼けで日が暮れて、ティンカー？の面々が、仲良くみんな  
で帰り道。

神愛美が溜息を着くように言った。

「わたし、ああ言う人達って、生で見るの初めて」

「わたくしもですわ」

「ボクも」

「妖子も」

「やっぱり迫力有るねえ、本物は——」  
荒井勇氣の一言に、一同揃って頷いた。

「流石の荒井さんも、本職には敵いませんわね」

「おいおい、それは無いだろ？」

翔子の冗談に、勇氣が憚然とした顔を見せた。

「シャレになんないよ、全く——」

ツボを抑えた勇氣の切り返しに、全員が弾けるように笑い出した。

「ユーキ先輩……」

再び歩き出しながら、俯いたままの海原水魚がポツリと呟いた。

「——さつきは——ありがとう」

「さつき？」

両手を頭の後ろに組んで、その豪快なバストを更に強調するような

格好で、上を向きながら勇気が聞き返した。

「さつき——あいつ等と——あのムチムチなお姉さんが何か言おうとした時」

「ああ、あれ——」

そらツとぼけてぶつきらぼうに勇気が洩らした。

「あたしもしょうがないよなあ。男だなんて言われたら、つい頭に血が昇ってさ、何が何だか判なくなつてさ——」

「荒井さんたら……」

勇気の思いやりのこもつた不器用な誤魔化し方に、翔子が温かな苦笑いを洩らした。

「良い気風ですわね、荒井さん」

「何さ」

何やら横から覗き込むような翔子の悪戯っぽい笑顔に、勇気が妙な警戒心を抱いて視線を返した。

「ホント、荒井さんて、後輩想いの良い先輩で——」

「あんたナニ嬉しそうな顔してんの、一体」

何かを企んでいる事がアリアリの翔子の持つて回つた笑顔に、勇気が怪訝な顔で答えた。

「——とーっても男らしくてステキですわ」

「手前工、天野！」

声を荒げた勇気を尻目に、翔子が慌てて逃げ出した。

「イヤーン、怒らないでエ。誉めてますのにイ——」

「そんな誉め方が有るか！」

身軽な翔子を、長い脚をからげて勇気が追いかけた。

「あーん、女の子に暴力はいけませんわア」  
「あたしだって女だ！」

他愛の無い二人の掛け合いに、残りの三人がまたまた笑い出した。

「どうだ、参ったか？」

「いやあーん、許してエ、お母様に叱られちゃう。お嫁に行けなくなっちゃうウ」

勇気に締め上げられながら、翔子がおどけて言った。

「もう判りましたわ。この通り謝りますから、許してエ」

「いや、許さない。アタシヤこれだけは頭に血が昇って我を忘れちまうんだ！」

「アーレー、命ばかりはお助けえ——」

愛美、水魚、妖子の三人が、益々おかしそうに笑い続けた。

「あー、ホントに可笑的いや——」

涙を拭きながら、水魚が呟いた。口に出した後は心の中で。

“ホントにありがと、先輩——”

「あー、もー、荒井さんたら乱暴なんですから。まるでホントにおと……」

「何だい？」

「いいえ、なーんにも——」

漸く一段落着いた所で、水魚が軽く駆け出して、全員に対するような位置に立った。

「先輩——」

水魚の素直な笑顔は透明で、夕日に照り映えて喻えようも無く清らかに見えた。紛れも無くその笑顔は可憐で純真な、どこから見ても

申し分ない少女の笑顔だった。

「これからも、ヨロシク——」

「ヨロシク——」

気を付けの姿勢の水魚の傍らに、妖子も並んで愛らしく立っていた。

「お願いしまあす！」

「しまあす！」

水魚と妖子がペコリと揃ってお辞儀をした。

## 仁義なき戦い？ 【8】

その頃、デスハードのアジトでは――

「あークソ、忌々しいつたら――」

日本支部就任の初仕事を成功裏に飾る事が出来なかった大幹部、ムチムチプリンセスが息を切らせて早速特訓に汗を流していた。衣装は例のムチムチファッションではない。動き易く生地が分厚い、汗を搾り出す為に最適な、ボクサーなどが試合前に良く着用しているようなウェアである。

「ホントに、何て忌々しい連中なのかしら」

憎き美麗戦隊の忌まわしき姿を思い浮かべながら、プリンセスは益々気合いを込めてトレーニングに本腰を入れるのだった。

彼女は燃えに燃えていた。決して“萌え”ではない。真剣な表情で、歯を食い縛って燃えていた。体脂肪もまた燃えていた。

「だけど――」 だけど、見てらっしゃい。この次はこうはいかないわよ――」

「プリンセス……」

何が彼女をここまで駆り立てるのか、ベルトコンベア式ルームランナーの上でわき目も振らず一心に体を動かすプリンセスの姿が、下端たちの目には何やら意地らしく映るのだった。

「次こそは―― この次こそは―― 見てらっしゃい、ティンカー?!」  
青春の、爽やかな汗―― とは必ずしも言い難いものが有るとは言え、額に汗を輝かせて一心不乱に励む姿はえも言われず美しかった。彼女が何故ここまで熱心に汗を流そうと言うのか、今更説明の必要は有るまい。

「あたしは――あたしは、絶対に負けないからね！誰がこの世で最も美しいのか、必ず思い知らせてあげるからね！」

頑張れ、ムチムチプリンセス！

負けるな、ムチムチプリンセス！

宿敵ティンカー？との仁義無き戦いは始まったばかりなのだ！

目指せ、薔薇色の悪の世界、悪役主役よモテモテよ！

「負けない！わたしは絶対に負けないからね！憶えてらっしゃい、見てらっしゃい！」

・ ・ ・ つづく ・ ・ ・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4764h/>

---

美麗戦隊ティンカーV（ファイヴ）

2011年10月5日21時07分発行